

講座名（専門科目名）	精神医学教室	教授氏名	池田 学
学生への指導方針	学生の希望を重視し、下記のグループに入って頂き、指導教官が責任を持って指導します。		
学生に対する要望	基礎・臨床研究を徹底して学び、良き指導者となれるよう努力して頂きたいです。		
問 合 せ 先	(Tel)06-6879-3051 (Email)wafukai@psy.med.osaka-u.ac.jp	担 当 者	高橋 隼
その他出願にあたっての注意事項等			

精神医学教室は認知症や精神疾患の解明と治療法の開発を目指す多角的研究を行っております。以下の5つのサブグループと【生物学的精神医学研究室】から成り立っており、各グループ間で相互にデータベースの共有や活発な討論を行っています。

【神経心理研究室】では、精神機能の脳内メカニズムの解明、および神経心理学的知識の臨床応用を目的に研究活動を行っています。神経心理学とは、人の認知、行動、感情、思考、さらには自我意識や社会性などといった人の心の働きと脳の関連を調べる学問です。研究対象としている疾患は、老年期妄想症など精神科に関連した疾患のみならず、脳神経外科や救命救急から紹介される、高次脳機能障害も含まれます。また、健常者を対象とした研究や、情報通信技術（information and communication technology: ICT）を用いた認知症の研究、認知症患者さんの在宅支援に関する研究も行っております。脳自体を調べるには、頭部 MRI や脳血流 SPECT といった、画像検査を主に用いておりますが、今日の画像解析技術の進歩により、より細かい特徴を捉えることが出来るようになっております。このような研究を行うことを通して、精神症状や認知機能障害を正確に捉えるための臨床的な技術や、画像読影の技術、解析手法を身に付けることが出来ます。また、当研究科の他の研究室と連携した研究も行っております。

【神経化学研究室】では、精神神経疾患の分子レベルでの病態解明を礎として、臨床応用を目指した研究活動を行っています。大多数の精神神経疾患には、いまだに根本的な治療法や明確な診断方法がなく、患者さんやそのご家族のニーズが十分に満たされているとは言えません。渾然とした精神神経疾患を深く理解し、その層別化を進め、それぞれに対して最適な治療法を開発するためには、病態を分子レベルで深く理解することが必要です。当研究室では、臨床精神医学教室としては国内随一の最新鋭の研究設備を駆使しながら前頭側頭型認知症、遅発性統合失調症、自閉症の分子病態解明、アルツハイマー病発症前診断マーカー開発、アルツハイマー病の A β 脳内蓄積の制御機構研究などのプロジェクトが進捗しており、国際的にも高い評価を得ています。研究活動にあたって、医師免許の有無は問いません。これまで大学院を卒業した方のうちの多くが、海外（米国、ドイツなど）の研究機関へ留学や研究就職をしています。精神医学教室内の他研究室や国内外の研究機関との共同研究も行っています。

【生物学的精神医学研究室】では、統合失調症を中心とした疾患研究を行っています。当グループでは眼球運動検査などの生理機能、心理検査による認知機能、脳画像やゲノムなど血液サンプルからの情報を用いて統合失調症の診断に有用なバイオマーカーの開発および病態の解明を目標とし、国内多施設と共同研究を行っています。

【認知行動生理学研究室】では、脳波、脳磁図、磁気刺激、経頭蓋電気刺激など神経生理学的な手法を用いた研究活動を行っています。臨床的にも脳波が重要な意義を持つ認知症性疾患、てんかんを初め、統合失調症、うつ病など主要な精神疾患も対象として、脳波・脳磁図を定量数値解析し、病態解明、鑑別診断や治療効果の予測・判定に応用する研究を行っています。磁気刺激による治療や脳機能評価、経頭蓋電気刺激の認知機能への効果などの試験的な試みも行っています。また、阪大の高等共創研究院との共同研究で、脳波と AI を駆使した認知症の超早期鑑別診断も開始しています。

【脳波睡眠研究室】睡眠の問題はそれ自体が改善・治療の対象になるとともに、統合失調症、気分障害、認知症、神経発達症など、様々な精神疾患あるいは身体疾患の病態と密接に関与しています。私たちはこのように幅広い領域に関連する睡眠の問題について診療・研究を進めています。診療においては、睡眠の特殊な病気であるレム睡眠行動異常症、ナルコレプシー、レストレス・レッグズ症候群、睡眠時無呼吸など様々な睡眠関連疾患を診療する専門外来を行い、必要に応じて睡眠ポリグラフ検査（PSG）を行っています。睡眠関連疾患を包括的に診療できる専門医は本邦では非常に少ない状況です。大学院在籍中には睡眠専門外来を指導医とともに担当し、PSGを含む臨床研究データの収集とともに睡眠学会専門医の取得を目指し、睡眠専門医療を担える人材育成を行っています。研究はこのような専門外来の診療データを用いた臨床研究を主としており、睡眠関連疾患の病態解明、診断技術の向上、治療アドヒアランス改善などの臨床研究に取り組んでいます。他の研究チームや講座、関連病院の睡眠医療センターと連携しながら進めるプロジェクトが多いです。一方、睡眠に関わる問題は睡眠関連疾患だけではなく、睡眠不足や睡眠・覚醒リズムの乱れなど生活習慣自体の問題も重要な健康管理上の課題となっています。このような睡眠社会学といわれる領域についても、大阪大学キャンパスライフ健康支援センターでの診療や健康診断データを用いて研究に取り組んでいます。

【児童青年期（精神病理）研究室】では、精神疾患の病態や治療、支援を精神病理学的に検討することで、医学領域にとどまらず、行政、福祉、教育、司法領域など社会に還元することを目的とした研究活動を行っています。神経発達症、解離性障害、トラウマ関連障害などの精神疾患だけでなく児童青年期精神医学、周産期メンタルヘルス、LGBTQ、グリーフケア、AYA世代のがん患者に付随するメンタルヘルスの問題なども研究対象に含みます。また、神経発達症の診断や支援、神経発達症特有の症状に関する診療・研究を進めています。神経発達症は、児童青年期のみならず、成人期においても社会適応に困難が生じる原因として、注目すべき概念ではありますが、特有の症状の存在や、定型発達との連続性、他精神疾患の症状との鑑別の困難さなどから未解明な部分が多い病態です。その病態、支援に対しても、精神病理学的な観点をもちながら介入を行なっています。研究手法としては、記述精神病理学やロールシャッハ・テスト（阪大法）を中心とする心理検査等です。当研究室に根付く、一例一例の症例を丁寧に探究する臨床マインドを大切に、精神療法等の臨床実践から得られる事例研究を行うと共に、他の研究室と連携した研究も行っています。またこれまでの精神病理学的アプローチに加え、2024年度から自閉スペクトラム症やADHDなどの病態解明に向けて、臨床検体、大規模データ解析、モデル動物による機能解析を組み合わせた用いたゲノム医学研究を、連合小児発達学研究科や国内外の多施設との連携した研究を展開しています。とくに国内外での学会発表や論文作成など積極的に支援しています。